

モモ‘紅博桃’の新規枝変わり‘福島大学1号’

○佐藤 守¹・高田大輔¹・田村尚之²・河井崇²・牛島幸一郎²・福田文夫²・中野 龍平³

(¹ 福島大農学群, ² 岡山大院環境生命科学研究所, ³ 京都大院農学研究科)

‘Fukushimadaigakuichigo’, a new bud sport of peach ‘Beni-hakuto’

○Sato, M¹., D. Takata¹, T. Tamura², T. Kawai², K. Ushijima², F. Fukuda² and R. Nakano³

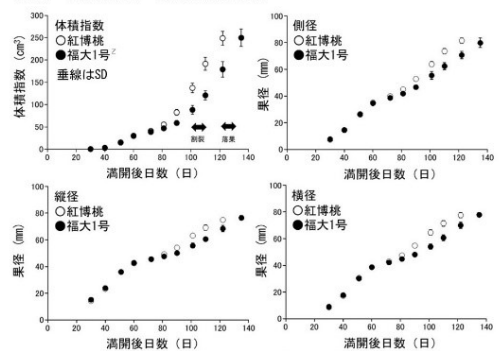
[目的] ‘あかつき’は日本における主要な経済品種であるが, ‘暁星’, ‘まどか’, ‘紅博桃’など幾つかの芽条変異が経済品種として流通している. リンゴでは果皮着色の芽条変異が主として経済品種として評価される表現型であるが, モモでは熟期の芽条変異が経済品種として高く評価されており, 上記品種も同様である. この度, 熟期において母品種‘紅博桃’と異なる芽条変異を確認し‘福島大学1号’(第1図)として種苗登録申請をしたのでその概要について報告する.

[育成経過] 石上一成氏が2003年(平成15年)伊達市の果樹種苗業者より‘紅博桃’1年生芽接苗を購入し, 伊達市のモモ圃場に定植, 2本主枝開心形仕立てとして育成した. 3年後(2006年)の初結実から結実がそろった5年後頃に第1主枝とした側芽から発芽した新梢から育成した主枝全体に結実した果実の生育の様相と成熟期が第2主枝として育成した頂芽方向の主枝(母品種)の果実とは異なっていた. 2013年に石上氏より相談された演者は2014年に, 主枝分岐部から先の全ての側枝上の果実の成熟期が一方の主枝の‘紅博桃’果実より2週間程度遅く, 当該変異は主枝発芽時の芽条変異であることを確認した. ‘紅博桃’とその芽条変異個体の生育特性を比較するために2018年9月に芽条変異樹の両主枝(‘紅博桃’と‘福島大学1号’)の新梢を採取, 種苗業者に委託して育成した芽接ぎ苗を2019年4月に福島大学食農学類果樹ほ場に定植した. 2018, 2019, 2020年に‘あかつき’および‘紅博桃’を対照品種として農林水産植物種別審査基準(もも種・ネクタリン変種)に基づく特性調査を実施し, 区別性, 品質の均一性および安定性を確認した. 併せて2019年, 2020年, 2021年に満開後30日から成熟期まで10日間隔で‘紅博桃’と‘福島大学1号’原木の果径調査を実施した. 石上氏より登録申請地位の譲渡を受け, 2020年12月に種苗法に基づく品種登録出願(品種登録出願の番号第35140号)を行い, 2021年5月に品種登録出願公表された(農林水産省告示第七百三十八号).

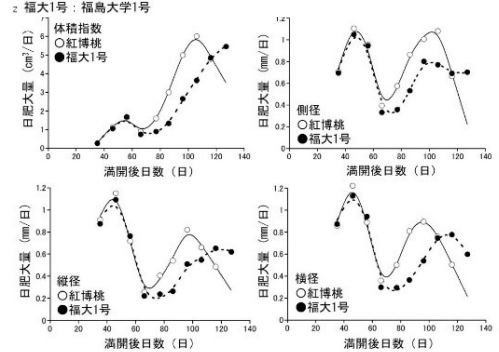
[特性の概要]花粉は有, 核は粘核である. 母品種の‘紅博桃’と比較して花卉が大きいこと, 縫合線が広いこと, 果皮の着色が劣ること, 成熟期が約10日から2週間遅いこと, 後期落果が著しく多いことで区別性が認められる. ‘あかつき’と比較して花卉が大きく, 葉身の長さが短く, 果形が‘あかつき’偏円形に対し円形であること, 核が小さいこと, 成熟期が約3週間から1か月遅いことで区別できる. ‘福島大学1号’の2020年の果実肥大は, 硬核期(第Ⅱ期)は, 満開後60日~80日, 果実肥大期(第Ⅲ期)は満開後80日~125日, 成熟期が満開後125日~135日であった. 硬核期は‘紅博桃’より約10日長かった(第2図). 日肥大盛期は, 幼果期は満開後55日頃(‘紅博桃’と同期), 果実肥大期は満開後120日頃であった(第3図). 満開後100日~110日に縫合線の割裂を主とする裂果発生が集中し, 裂果発生率は65%に達した. 裂果発生期後, 縦径と側径の日肥大量のピークは不明瞭であったが, 横径肥大は影響されなかった. また, 満開後120日以降に生理落果が多発し, 成熟期までの落下率は85%に達した. 以上のように‘福島大学1号’は第Ⅲ期初期の割裂が顕著であった. 割裂した果実は収穫期までに落果した. 成熟果は縫合線のアントシアン発現が顕著であるが, 果皮着色は母品種より少なく, 成熟果の硬度は高い傾向が認められた. なお, 2020年原木調査では成熟果の核割れが‘紅博桃’13.3%に対して‘福島大学1号’40.0%で著しく多かった. これが品種特性であるのか今後検討する必要がある.



第1図 ‘福島大学1号’の果実外観と断面



第2図 ‘紅博桃’と‘福島大学1号’の果実肥大の推移(2020年)



第3図 ‘紅博桃’と‘福島大学1号’の果実日肥大量の推移(2020年)